

KENDAMA

廿日市市 けん玉史録

1921 ▶▶▶ 2022

2023年3月
廿日市市

けん玉スポット

けん玉の町・廿日市では、まちのあらゆる所でけん玉をモチーフにしたデザインやモニュメントを見つけることができます。

けんだま公園



新宮中央公園という名前から「けんだま公園」に愛称が変わり、けん玉をモチーフにした遊具「たまちゃんの宮殿」は子どもたちに大人気です。たまちゃんを探してみてください。

けん玉電灯



廿日市駅北地区の区画整理事業において、廿日市市の東の玄関口である駅前にふさわしい賑わいゾーンには、けん玉をかたどった照明灯が設置されました。

けん玉マンホール



けん玉の技を示した「けん玉マンホール」。このイラストは「世界一周」という技を表現しています。他にも色々な技が描かれたマンホールがあり、マンホールカードも製作しています。

けん玉タイル (市内各所)



将来にわたり市民に親しみを持って利用していただくため、平成14年に「ふれあい通り」には、「さくら」と、発祥の地である「けん玉」のタイルが設置されています。

たまちゃん看板



廿日市駅通り商店街を盛り上げようと、看板設置を検討した際「廿日市といえばけん玉！」ということで、たまちゃんを起用しました。けん玉商店街と名付けられる前から、商店街とけん玉には深いつながりがあったようです。

路上けん玉アート



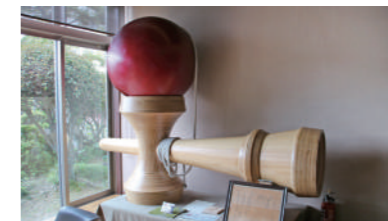
JR廿日市駅南側駅前広場の整備に伴い、けん玉商店街へ向かう路上誘導サインとして「けん玉をモチーフとしたアート」を募集し、選ばれた作品は、JR廿日市駅前の歩道に設置されています。

巨大けん玉



第2回けん玉ワールドカップの際、大会シンボルとして廿日市木材団地協同組合より寄贈されました市役所1階ロビーに設置されていますので、ぜひ見てください。

世界一の巨大けん玉



宮浜温泉の宮浜グランドホテルには、全長2.7メートル、重さ90kgの巨大けん玉があります。2014年にテレビ番組で「世界一大きいけん玉」という企画で制作されました。

石のけん玉モニュメント



「ふれあい通り」に、廿日市ライオンズクラブがチャーターナイト20周年記念事業として歩道にけん玉モニュメントを寄贈・設置され、夜間はライトアップしています。

2023年3月発行

発行：廿日市市 編集：産業部産業振興課
〒738-8501 広島県廿日市市下平良一丁目11-1
TEL / 0829-30-9140
FAX / 0829-31-0999

参考文献

広島県の木工職人
けん玉学 起源から技の種類・世界のけん玉まで

写真提供

株式会社本郷 はつかいち観光協会
一般社団法人グローバルけん玉ネットワーク (GLOKEN)

けん玉の歩み

History of Kendama

誕生～昭和

1970～1974年
昭和45年～昭和49年

最盛期には6軒以上の業者が製造し、廿日市は全国で約4割のシェアを占めていた。年間製造数は約30万個を越え、国内はもとより海外にも輸出していた。

1924～1935年
大正13年～昭和10年

これまで、けん玉はすべて手作業で製造していたが、1924年(大正13年)頃から動力の普及により、生産が向上、売り上げも上昇し、大流行となった。廿日市でも本郷木工のほか、数社でも生産を始めている。昭和に入って工場制工業による木工業が栄え、1929年(昭和4年)の調査では、家内工業の木工玩具製造業者が33戸、工場は4つあり、25人就業。



1877年 明治10年

木材の集積地、廿日市で江戸時代に始まった傘用ろくろ及び「廿日市そろばん」を生み出した「廿日市ろくろ」の技術を受け継ぎ、明治時代に木材を材料とする工業が発展する。当時、廿日市の人口は3,000人程度だったのに、そのうち1,000人が木工業関連に従事していたという説もある。



1907年
明治40年

日本で棒と玉だけのけん玉が大流行した。

1600年以前

けん玉の起源

16世紀のフランスにおいて王貴族の男女がけん玉の原型とされるビルボケで遊んでいる様子が鮮明に描かれた銅版画が残っている。アンリ3世やルイ15世も楽しみ、フランス革命が起きても廃らなかつたという。

1975年 昭和50年5月

公社)日本けん玉協会が東京都田無市(現西東京市)で創立される。初代会長は童話作家の藤原一先生。

1979年 昭和54年

「第1回けん玉道全日本選手権大会」が東京都田無市で開催された。



1983年 昭和58年5月

「第1回けん玉道西日本選手権大会」が熊本県小国町で開催された。



1984年
昭和59年6月10日

「第2回けん玉道西日本選手権大会」が廿日市のナタリーで開催された。

昭和後期から平成初期までの状況

主に観光物産としてけん玉市場を席巻していた廿日市のけん玉は、時代のニーズの変遷と共に需要は激減し、それと共に製造業者も減少、1975年(昭和50年)にはわずか3社となった。

1937年 昭和12年

けん玉は世界各地で流行し、フランス映画の名作「望郷」(ジュリアン・デュヴィヴィエ監督)でジャン・ギャバンが演じる殺し屋ペペ・ル・モコの子分が、けん玉をやっているシーンが再三にわたって出てくる。

1945年 昭和20年

戦争中、廿日市のけん玉工場も軍需品を製造していたが、戦後の復興とともに、廿日市で数社が自社製品のけん玉の製造を復活した。

けん玉発祥の年

1921年 大正10年

呉市出身の江草濱次氏が、当時家具の小物を製造していた廿日市の本郷木工(現株式会社本郷)に訪訪。江草氏が実用新案を取得した図面と玉と棒だけのけん玉を持って来て、製作を依頼した。そして、本郷東平氏により初めてけん玉「日月ボール」が削りだされた。日月ボールとは、玉と棒だけであった。それまでのけん玉に、受皿を取り入れたものであり、現在のけん玉の形の誕生である。



1777年
安永6～7年

棒と玉だけのけん玉が日本にも登場したことが、喜多村信節の「嬉遊笑覧」(1830年・文政13年)に記載されており、主に酒席の遊びとして用いられていたらしい。けん玉は「拳玉」と書かれている。

廿日市のけん玉にはこんな歴史があったんだね!

廿日市市マスコットキャラクター「たまちゃん」



廿日市で「日月ボール」が誕生 全国的なブームに

廿日市市におけるけん玉づくりは、百年を超える歴史を持っています。江草濱次氏という呉市出身の職人が、第一次世界大戦が終わった大正七(一九一八)年に従来のかん玉を改良して、現在多くの人々に親しまれているけん玉の原型をつくり、大正八年に実用新案を取得しました。三年後の大正十(一九二一)年に、江草氏は木製玩具の生産で有名だった廿日市市を訪れ、本郷木工(現・株式会社本郷)に依頼して、けん玉の製造を始めました。江草氏は自らのけん玉を「日月ボール」と名づけました。そのネーミングは、太陽のようにまっ赤に色付けられたボールと、三日月型に削られた皿の部分に由来しています。けん玉と似た玩具は、すでにいろいろな国にありました。日本にもフランスで流行した「ビルボケ」というボールと棒からなる玩具が江戸時代に伝わったとされ、明治時代には子どもの玩具として流行していました。しかし、日月ボールはそれまでのけん玉とは形が異なります。皿が増えたことよって技の数が増え、大人も子どもも楽しめる洗練された遊びへと発展していきました。廿日市市が「けん玉発祥の地」とされるのはこのためです。当初、けん玉は足踏み式のろくろを回して、手作業でつくられていました。それでは製造が追いつかないため、大正十三(一九二四)年頃から動力式のろくろが導入されました。大量生産が可能になると、江草氏は「日月ボールの歌」というCMソングもつくって大々的に販促をスタートさせます。こうして、日月ボールは関西方面を中心に爆発的なヒット商品となり、廿日市市から毎日貨車で全国に向かって出荷されて行きました。昭和時代に入ってからブームは続き、実用新案の権利が消えてからは、東北のこけし生産地など、全国でお土産や民芸品としてけん玉がつくれるようになっていきます。

「けん玉」と廿日市市

廿日市市は、古くから中国山地の木材の集積地として栄えてきました。十二世紀に建造された厳島神社の美しさからも分かるように、廿日市市は歴史的に木材とその加工技術とに強いつながりをもっていました。江戸時代には「廿日市ろくろ」と呼ばれる、高度な木材加工の技術が生まれます。明治時代になるとその技術を活かして、木工玩具などさまざまな工芸品が生産され、宮島を訪れた観光客に土産物として人気を集めていました。この技術が、けん玉づくりにも応用されたのです。

1998年 平成10年

廿日市で最後までけん玉を製造していた共栄玩具有限会社が、社長の西村明信氏の逝去により、生産を中止し、廿日市におけるけん玉の歴史が一時途絶える。



2001年 平成13年

けん玉着ぐるみマスコット「たまちゃん」を観光PR用に作成し、10月の「廿日の日」で披露。その後も、イベント等で活躍している。

2000年 平成12年

市内でのけん玉製造が途絶えたことを惜しむ声が市内外から届き、観光協会、商工会議所と市が連携し、廿日市市木材利用センターでけん玉の製造を開始した。



2011年 平成23年～

廿日市市は、2011年(平成23年)から毎年市内すべての小学一年生に、廿日市市木材利用センターで製造されたけん玉を配布し、けん玉の普及を図っている。



木材利用センターけん玉

2014年 平成26年6月22日

「けん玉商店街」(廿日市駅通り商店会)に、けん玉セレクトショップ「kendama shop&salon 夢」が誕生した。



2014年 平成26年7月12・13日

2000年代から、アメリカを中心に海外のストリートスポーツとしての人気の高まりを受け、けん玉発祥の地廿日市でけん玉ワールドカップ廿日市実行委員会による「第1回けん玉ワールドカップ廿日市2014」が、新宮中央公園とふれあいプラザで開催された。初代の優勝者はアメリカのボンズ・アトロン氏



第1回けん玉ワールドカップ廿日市2014

2013年 平成25年

株式会社イワタ木工が新ブランド「夢元無双」の製造販売を開始した。



2015年 平成27年～

当時の廿日市木材団地協同組合により、高さ2.8メートル、重さ約200キロの巨大けん玉が製造された。けん玉ワールドカップの際、毎年会場へ運んでいるが、通常は廿日市市役所1階に置かれている。



ペイントコンクール入選作品



けん玉川柳大会

2021年 令和3年

けん玉発祥100周年を記念して、「けん玉川柳大会」「けん玉ペイントコンクール」などを開催した。

2021年 令和3年8月21・22日

「けん玉発祥100周年記念 第8回けん玉ワールドカップ」をオンラインで開催。全国9会場で開催を実施した。



オンラインで開催した第8回けん玉ワールドカップ

100周年記念ポスター

けん玉の衰退から復活へ

第二次世界大戦中は、廿日市のけん玉工場も軍需品を製造していましたが、復興とともにけん玉の製造を復活させました。戦後も何度かけん玉のブームが起り、アメリカにもけん玉を輸出していたと言います。一九七〇年代(昭和四十五年)には、良質な競技用けん玉が普及したことにより、ファンの中で「けん玉ルネサンス」と呼ばれる大きなブームが起りました。その頃、廿日市市では六軒以上の工場が年間約三十万個以上のけん玉を製造し、全国の生産数の約四割を占めていました。

しかし、時代のニーズの変遷と共に需要は激減し、昭和時代の後期から廿日市市ではけん玉製造業者の転業や廃業が続きました。平成十(一九九八年)には最後の「一社だった共栄玩具有限会社も生産を中止し、廿日市市におけるけん玉の歴史は一時途絶えてしまいます。

しかし、その状況は長くは続きませんでした。多くの人が復活を望み、平成十二(二〇〇〇)年には、はつかいち観光協会、廿日市商工会議所、市が連携し、廿日市市木材利用センターでけん玉製造が復活したのです。十一月一日には、「けん玉づくり初め式」が行われました。復活の立役者になったのは、けん玉発祥の地の職人として、その技術を次世代に継承したいという強い意志を持ち続けていた元・共栄玩具有限会社の西村保宣氏です。

世界が認める「けん玉の聖地」に

この頃から、けん玉は世界へと広がっていききました。平成十六(二〇〇四年)には、以前から交流のあったモンゴルのけん玉選手団六人が廿日市市を訪れ、巨大けん玉の前で実技を披露しました。また、アメリカなど世界各国でけん玉がストリート・スポーツとして人気を集めると、廿日市市も「けん玉の聖地」として注目されるようになり、ついに平成二十六(二〇一四年)年、一般社団法人グローバルけん玉ネットワーク(GLOKEN)と、市と商工会議所、木材業界、観光協会など「オール廿日市」により、「けん玉ワールドカップ廿日市」がスタートしました。当初は海外勢に押されていました。廿日市教室からも世界チャンピオンが誕生しました。コロナ禍によるオンライン開催もありましたが、令和四(二〇二二年)までに九回の大会が行われており、世界中からトッププレイヤーが毎年廿日市市で素晴らしい技を披露しています。

廿日市市では、平成二十三(二〇一一)年から市内のすべての小学一年生に、木材利用センターで製造したけん玉を配付しており、子どもたちは学校や家で、けん玉という郷土が誇る伝統とふれあっています。廿日市市にとって「けん玉」とは、世代や国境を超えた重要なコミュニケーションの道具の一つなのです。

Process 1

玉づくりの工程

センターポンチという道具でサクラの中心に穴を開けて、きれいな円をつくるにはコツが必要で、一番難しいとされる工程です。

Process 2

皿胴づくりの工程

棒状の丸いブナ材を形削りして、中央部分をくぼませてから、大皿と小皿を加工し、中央部に剣先を通す穴を開けます。

in 甘日市市木材利用センター

けん玉の製造工程

Manufacturing process of Kendama



けん玉職人 鍋谷 一也 さん



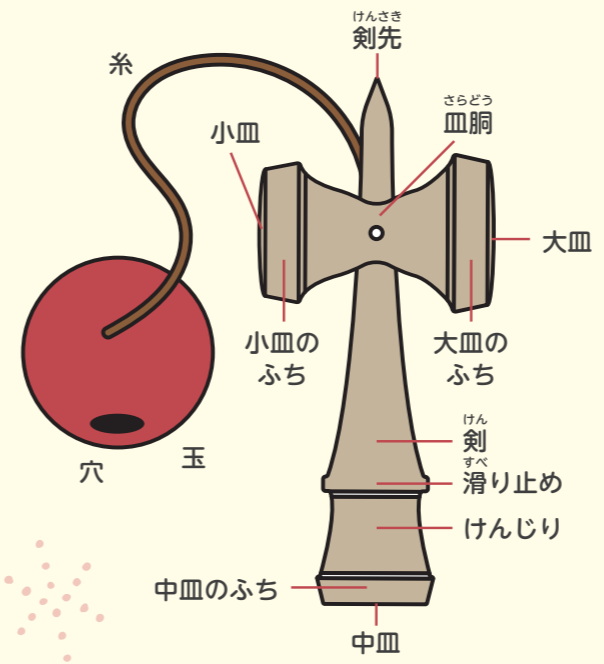
伝統の甘日市ろくろの技術でけん玉を製造しているんだって!

甘日市市木材利用センター

甘日市市木材利用センターでは、現在、熟練の職人が、一年に約二、〇〇〇個のけん玉を一つ一つ手づくりで製造しています。
けん玉の材料は、玉にはサクラ、剣や皿胴にはブナが主に使われています。旋盤という機械などを使ってサクラやブナを削って、磨き上げ、ていねいに組み立てています。

けん玉の名称

Part name of Kendama



「剣の根元」は便宜上の名称。なお、小皿とは両サイドの二つの皿のうち「小さい方の皿」、中皿とは三つの皿のうち「真ん中の位置にある皿」という意味であり、大きさは一般的に大皿<小皿<中皿となっている。中皿という名は、かつては「えんとつ」といわれていたものが昭和五十二年（一九七七）年に愛好家によって中皿と決定されたという説と、大皿と小皿ができたときに中皿と名がついたという説がある。

けん玉をつくる人たち INTERVIEW

木工品ならではのぬくもりが けん玉の魅力です

廿日市市木材利用センター

しみず木工所代表 銅谷 一也さん

自分の木工所を営むかたわら、十年ほど前から週二回廿日市市木材利用センターに通ってけん玉づくりに取り組んでいます。けん玉づくりを始めたのは、市の職員から西村保宜さんが後継者を探しているというので、西村さんが一人でけん玉づくりを継承していることは知っていて、これからどうなるのだろうと心配していたので、すぐに引き受けました。西村さんの指導は厳しかったですが、「こいつなら大丈夫」と思ってもらえたようです。三年前に西村さんが引退してからは一人で年間約二千個を製造しています。一番神経を使うのが玉の部分で、穴を開けて中心を取るのが難しいですね。けん玉の機械は新しくても半世紀以上前の相当古いものばかりで、調整するのも大変です。壊れても部品が無いので、自分でつくらなければいけません。ほとんど手づくりで、コンマ何ミリ単位の細かい作業ですが、手をかければ、手をかけるほどきれいなものができるし、金属やプラスチック製のものと違い、木工品ならではのぬくもりがあることがけん玉の魅力ですね。



ここでつくられたけん玉は、廿日市市の小学校に入学した児童に配られます。子どもたちが最初に手にするけん玉が、自分のつくったものだと喜んでやがりがいを感じます。子どもたちから感謝の手紙をもらったこともありますが、課外学習で小学生が見学に来ることもあるのですが、すごく喜んでもらっているようで、質問もたくさんしてくれます。私が西村さんから受け継いだように、これからも廿日市市にけん玉づくりを残していかなければいけません。西村さんは八十二歳までやっていたので、体が動く限りは続けたいですが、今の課題は人材の育成です。細かい作業が多く、女性にも向いている仕事だと思っています。ぜひ、皆さんにも挑戦してもらいたいですね。

唯一無二のものづくりで けん玉の価値を高めたい

株式会社イワタ木工 代表取締役 岩田 知真さん

私達はけん玉の価値を高めるため、使いやすさと、美しい仕上がりを目指し、世界中へ広めていくことを目標にけん玉づくりに取り組んでいます。二〇〇〇年頃、廿日市市よりけん玉製造の依頼がありました。最初は躊躇がありました。しかし、市内のけん玉大会で、子どもたちが目の色を変えて真剣にプレイする姿に感動し、製造することを決意しました。そして遊んだ後におもちゃ箱に放り込まれるようなけん玉ではなく、飾っていても美しいけん玉を作りたいと思いました。ただ昔ながらのけん玉の製造方法では、思った精度で加工が出来なかったため、自社で機械を作り、試行錯誤を経て、世界基準となる新しいけん玉の製造が実現しました。また使いやすさを考え、最も消耗する剣先の先端部分は樹脂にし、取り換え可能としました。けん玉業界では初めての試みでした。私達のけん玉ブランドは、「けん玉を通じて、達成感や、やりきる力を自分の夢への原点(元)として、夢を叶えてほしい。夢を叶えたいと思う気持ちに並ぶ素晴らしいものは無い(無双)」という思いを込めて、「夢元無双」という名前をつけました。



更にけん玉の価値を高めるため、二〇一七年から、パリで開催される世界最高峰のインテリア・デザインの国際見本市「MAISON&OBJET PARIS」に、目で見ても、使っても楽しめる「遊べるオブジェ (playable object art)」がコンセプトのけん玉も出展しています。その美しさが国内外からも評価され、海外の高級時計メーカーやアパレルブランドなど様々なブランドとのコラボレーションも実現しました。また、廿日市市では毎年「Kendama World Cup」を開催していますが、その発起人の一人として優勝トロフィーを製造しており、世界中のけん玉プレイヤーの集まる聖地として廿日市市を盛り上げ続けていきたいと思っています。これからも「つながり」を大切に、多くの方々に感動して頂けるものづくりを続けていきたいと思っています。

Process 3 けんづくりの工程

ならい旋盤を使って削り、サンドペーパーでいねいに磨きます。

01 材料をセットする



02 削る



03 剣先をカットする



何度もキレイに磨いているのね!

05 みが磨く



04 中皿を削る



次はこっちだ!



Process 4 組み立ての工程

玉の塗装は外注し、帰って来てから組み立てに入ります。木工品は、手をかければかけるほど良いものができるそうです。

01 糸の長さを決める



02 皿胴と剣をネジで止める



形が見えてきたよ



03 余った糸を切る



04 完成!!



完成!!



けん玉に適した木材にするには
手間と労力が必要です

大逸木材有限会社
代表取締役 大野 昌治 さん

けん玉の材料となる木材を製造し、廿日市市でけん玉を製造している廿日市市木材利用センターやイワタ木工に提供しています。けん玉は広葉樹でつくられています。玉の部分はサクラで、剣や皿の部分はブナでできています。広葉樹は身がしっかりしているのに、けん玉の材料にちょうど良いのです。当社は昔から廿日市市で広葉樹を幅広く扱っていたため、九十年くらい前のけん玉の黎明期から、本郷木工（現・株式会社本郷）や共栄玩具に材料を提供していたと聞いています。以前はお土産用やおもちゃのけん玉が主でしたが、今は競技用が多いので、よりシビアに品質が求められるようになりました。サクラやブナは、水分のあるままだと変形して狂いが生じてくるので、いったん板にして一年以上自然乾燥させてから、乾燥罐に入れ、人工乾燥させて仕上げます。玉は一度、角材にしてから丸くしていきます。雨を避けて五〜六年自然乾燥させると人工乾燥しなくても良いくらいになりますが、いずれにせよ手間と労力がかかる作業です。

桜は広島県産が中心で、廿日市市の吉和や北広島町、庄原市、三次市などのものを使っています。ブナは広島県では少なくなっているのに、広島県と鳥根県の県境のものや鳥根県産が多いですね。広葉樹は秋に落葉して身がしまるので、なるべくその時期に伐採したものが良いですね。毎週のように山に行くと木を見て、さわって、ひらめくものがあると取り寄せて製材し、質感などを細かくチェックしています。まったく同じ木というものはないので、けん玉に適した木かどうかを判断するには経験を積んでいくしかないですね。けん玉は廿日市市が誇る文化です。際を使って適度な運動になり、健康にも良いので、お年寄りにも普及させ、シニアの大会なども企画してもらえたらと思います。



オール廿日市を結集して
ワールドカップを実現

一般社団法人はつかいち観光協会
代表理事会長 塩田 ひとし さん

「けん玉ワールドカップ廿日市」を始めようと思っただきっかけは、動画投稿サイトでストリートけん玉のパフォーマンスを見たことです。欧米の若者たちが音楽に合わせて、私の動体視力では追いつかないようなすごい技を繰り広げていて、本当にびっくりしました。彼らは廿日市市が発祥の地だということを知っていて、聖地であると認識していたのです。このことを廿日市市の人たちにも知ってもらいたいと思い、けん玉のトッププレーヤーが技を競い合う世界大会を始めようと決意しました。BOONZの窪田保代表と協力して二〇一三（平成二十五）年秋から準備を始め、市と商工会議所、木材業界、観光協会など『オール廿日市』の協力を得て、翌二〇一四（二〇一六）年七月にあいプラザで第一回大会を開催することができました。何も無いところから勢いだけで始めた大会ですが、廿日市市の子どもたちが選手のパフォーマンスに驚き、目を輝かせているのを見て、やって良かったと思いました。

二〇一五（平成二十七）年からは、会場をサンチェリーに移し、規模を大きくしました。始めた頃は外国人選手と比べて日本人選手の技が遅れていると感じたのですが、二〇一七（平成二十九）年の第四回大会で早くも愛知県の金田奏君が優勝。二〇一九（令和元）年の第六回大会では、廿日市でけん玉を習った佐伯区空堀衣君が優勝し、地元から世界チャンピオンという目標を叶えることができました。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大により、二〇二〇（令和二）年から二大会はオンラインでの開催を余儀なくされてしまいました。二〇二二（令和四）年は何としても廿日市市で開催したいと思い、万全の準備をして臨みました。リアルとオンラインでのハイブリッド開催となりましたが、成功裏に大会を終えることができました。リアルで開催すると、選手同士や選手と廿日市市の人たちの素敵な出会いや交流があります。二〇二三年、大会は十回の節目を迎えます。これからも、けん玉ワールドカップを通して「けん玉発祥の地廿日市」を盛り上げていきたいです。



けん玉は廿日市市が生んだ
世界に誇れる宝物

砂原夢企画代表
けん玉名人 砂原 宏幸 さん

けん玉の伝道師として、新型コロナウイルス感染症が流行する前は一年に四百回くらいイベントや教室を開いていました。小さい頃から、どんな所にも持って行って、どこでもできるのがけん玉の魅力です。モンゴル、台湾、フィリピン、ニュージーランド、ハワイ、メキシコなど、海外にも何度も行きました。フィリピンは車で回ったのですが、途中で休憩するたびに車を降りてけん玉で遊んでいたら、みんながやらせてやらせてとやって来て、どこでもすぐに輪ができました。簡単な技でも最初にできた時はうれしくて、もうちょっともうちょっととやっていると難しい技もクリアできるようになる。一人でできるし、集団でプレイしても楽しい。入口は簡単だけど、奥が深いんですね。無限に挑戦して、成長し続けることができるし、けん玉で培った「やればできる」という自信は、他のことにチャレンジする時にも生きてくると思います。

子どもの頃は、「ニッサン」と呼ばれていた糸なしのけん玉で遊んでいましたが、中学生くらいになるとやらなくなってしまいました。けん玉と再会したのは、廿日市市で小学校の先生をしていた時です。けん玉クラブの顧問をしたことをきっかけに特訓を始めて、他の小学校やイベントなどでも教えるようになりました。けん玉の選手権大会も主宰しました。忙しくなって教師の仕事と両立できなくなり、五十三歳で教職を辞め、けん玉一本でやっていくことにしました。けん玉が一人の人間の人生を変えてしまったのです。廿日市市で生まれたけん玉は、世界に誇れる宝物です。廿日市市では小学校の新入生にけん玉をプレゼントしています。ワールドカップに加えて、それを使ってプレイするような地元根差した大会も開催できたらと思います。けん玉は年齢を問わないものですから、高齢者の健康増進に役立てていきたいですし、私もけん玉で体をリフォームして、細く長く、九十歳まではけん玉を教えていきたいです。



けんだま Q&A

- Q けん玉が廿日市で生まれた理由は？
A 廿日市は木材を材料とするおもちゃ作りが、江戸時代や明治時代から盛んだったため、「日月ボール」を考案した江草濱次氏が廿日市の職人に製作を依頼したからです。
- Q けん玉はどんな木で作られているのかな？
A 玉の部分は主にサクラで、けん玉の部分は主にブナで作られています。廿日市が木材の集積地だったことも、けん玉が廿日市で生まれた理由の一つとされています。その他、けん玉の種類によって、ハードメープルや樺、ホワイトオークなどの様々な木材を使用しています。
- Q 「第1回けん玉ワールドカップ」で優勝したボンズ・アトロンさんはどこの国の？
A アメリカの方です。第1回大会には、世界10の国と地域から107名が参加しました。

- Q どうしてけん玉って呼ばれるんだろう？
A 現在では、持ち手を「けん」と呼び、玉と併せてけん玉と呼びますが、そもそもは、江戸時代に流行した「拳あそび」の1種として、玉を使って遊ばれたことから「拳玉」という名前が付いたと考えられます。
- Q 現在の形のけん玉は廿日市で生まれたけど、その頃はなんて呼ばれていたのかな？
A 「日月ボール」と呼ばれていました。玉の部分を「お日さま」、けん玉の部分を「月」に見立てたネーミングだったようです。